

阿嘉島の蝶 Part 14

シロオビアゲハの産卵と成長 I

Butterflies in Akajima Island, Part 14:
Egg laying and larval growth of Common Mormon Butterfly *Papilio polytes* I

T. Kamibayashi

2008年10月の初旬、阿嘉島臨海研究所4階のレストランのベランダを、複数のシロオビアゲハが幾度となく訪れる様になった。お目当ては、花壇のニチニチソウの花の蜜と、鉢植えのグレープフルーツの苗である。花の蜜は食料だが、グレープフルーツはそうではない。メスのシロオビアゲハは、その柔らかな新芽を選んで卵を産み付けるのだ。ある日、何気なく外を見ていると1頭のメスがやって来た。鉢はベランダの内側に置いてあるので、花壇に茂っているアリアケカズラに阻まれており、目的の植物がどこにあるのか探しながら舞っている。ようやくグレープフルーツにたどり着いても、次は生まれたての幼虫が食べやすいような柔らかい葉や新芽を探してしばらく吟味している。そして、見つけた葉の上にわずかな時間で卵を産みつけて、メスは再び舞

うように去っていった。

それからというもの、その小さなグレープフルーツの苗には複数のシロオビアゲハが産卵に訪れるようになった。このまま卵が孵化しても、全ての幼虫は養えそうにないので、本来のシロオビアゲハの食樹である、シークワサーの葉を山から採取してきて幼虫を育てることにした。

シロオビアゲハのメスには白帯型と赤斑型の2つのタイプが存在し、オスに赤斑型は存在しない。この秋、幸運にも、この2つのタイプのメスの産卵に立ち会うことができた(写真1、2)。そして、飼育結果はとても興味深いものとなった。

今回の飼育では、卵期は一律に3日。幼虫期(前蛹期を含む)は最短で17日、最長で30日。蛹期(越冬した蛹は除く)は最短で10日、最長で17日。年

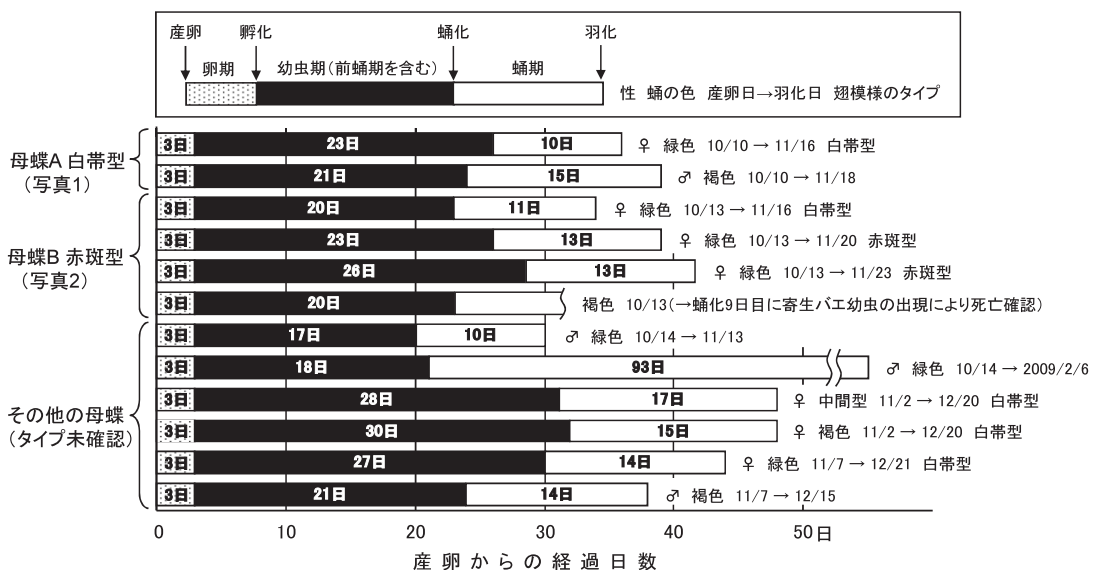


図1 シロオビアゲハ幼虫の成長日数

越えをした越冬蛹では94日と、ゆうに3ヵ月間を蛹で過ごした(図1)。

蛹は、緑色型と褐色型の2つのタイプに別けるのが一般的だが、その中間型とも呼べる見事なまでに擬態した蛹(写真3)の存在を確認した。蛹が何色になるかは、蛹化した場所の環境に左右されるという。飼育容器の樹脂面で蛹化したものは、緑色型と褐色型、シークワサーの枝や葉の上で蛹化したものは、緑色型と中間型であった。初め、褐色型の蛹は越冬するものと思い込んでいたのだが、今回の飼育では年越えをする個体はなく、意外にも、早期に蛹化した緑色型の蛹が越冬蛹になった。(2008年11月4日に蛹化、2009年2月6日に羽化)(図1)。

赤斑型母蝶の卵から孵化した幼虫は、4つのうち3つが無事に成長して羽化することが出来たのだが、残りの1つは蛹化後、寄生バエの幼虫の出現により死んでしまった(図1)。どうやら、採取したシークワサーの葉に生み付けられた寄生バエの卵を幼虫が食べて体内に取り込んだらしい(寄生バエの幼虫は、現れたその日に蛹化したがる、年を越えても未だに羽化していない。死亡したのかもしれない)。羽化した3個体はすべてがメスであったが、2個体が赤斑型で1個体が白帯型であった(図1)。先述のとおり、翅の様子はメスのみに現われる限性遺伝で、赤斑型が遺伝的に優性であると言う。知ってはいたが、今回赤斑型から生まれた白帯型を見て、あらためてこのことを確認した。母蝶は赤斑型だったが、間違いなく白帯型の遺伝子をもっていたのである。

今回は、産卵が集中した10、11月の秋冬の飼育であったが、次回は食樹になる柑橘類の種類を増やして、春夏の飼育を試みる予定である。



写真1 産卵に訪れた白帯型のメス



写真2 産卵の姿勢をとる赤斑型のメス



写真3 中間型の蛹